# 集団の凝集性と主体性の変化

～OTデリシャス体操プログラムを通して～

医療法人社団　五稜会病院
作業療法　泊り 由希子

## はじめに

- 当院の療養病棟の長期入院患者は周囲に興味・関心が向かず活動性が低下しており他者との交流が乏しい傾向がある。また主体的に自身で取り組むことや自己決定の機会が少ない。

↓

同質性の高い小集団で作業療法(以下OT)

デリシャス体操プログラムを実践

**作業療法士としての狙い**

自身のペースを大切にしながら失敗や緊張の中でも周囲から認められ楽しみを実感してもらいたい

- デリシャス体操とは？
  集団力動を用いてウォーミングアップ後(ゲーム形式要素を用いた構音訓練など)に嚥下体操を用いた発声や体操プログラム
- 期待する効果
  - ・身体機能維持・向上
  - ・主体性の獲得

## 対象者の特徴

- 60歳以上であり基礎体力低下が認められる
- 統合失調症者が大半であり過半数以上が女性
- 食事の際にムセが多い
- 活動性がやや乏しく、活動の幅が広がらない

## 集団の特徴

- 開放度：セミクローズド
- 頻度・時間：5～6回/週・15～20分/回
- 集団の大きさ：8～10名

## 経過

| | | | |
|---|---|---|---|
| 時期 | Ⅰ：受身的であり集団運営はOTR主体の時期(開始～3ヶ月) | Ⅱ：患者間に関わりが生まれ運営を工夫し始めた時期(開始4～11ヶ月) | Ⅲ：主体的に取り組み楽しみの一つとなる時期(開始12ヶ月～現在) |
| 個人 | ・受身的で活動性は低い | ・受身的からやや自発的 | ・自発的で活動性は向上 |
| 集団 | ・凝集性：低い<br>・雰囲気：不十分<br>・相互交流：乏しい<br>・所属意識：低い | ・凝集性：普通<br>・雰囲気：良い<br>・相互交流：中等度<br>・所属意識：中等度 | ・凝集性：高い<br>・雰囲気：大変良い<br>・相互交流：活発<br>・所属意識：高い |

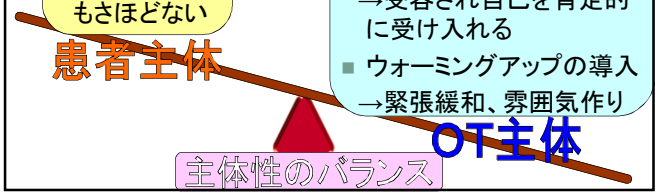
## 経過(Ⅰ：受身的であり集団運営はOTR主体の時期　開始～3ヶ月)

**患者の様子**

- 受身的
- 参加頻度も斑
- 緊張感強く、患者間の交流もさほどない

**OTRの対応・介入**

- 根気強い声かけ、目標合意を図る
- 正のフィードバック
  →受容され自己を肯定的に受け入れる
- ウォーミングアップの導入
  →緊張緩和、雰囲気作り



## 経過(Ⅱ:患者間に関わりが生まれ運営を工夫し始めた時期　開始4～11ヶ月)

患者の様子

- 体操に工夫し主体的に声を出しながら取り組む ex)上肢挙上体操時に「ばんざーい」と声を出す
- 自発的に同室者を誘う
- 所属感の芽生え

OTRの対応・介入

- 評価し定期的にフィードバック
- アンケートの実施

→感想や効果、希望など

- 声かけの変化

→「皆が待ってますから行きましょう」

## 経過(Ⅲ:主体的に取り組み楽しみの一つとなる時期　開始

患者の様子

- 開始時間になると自発的に場へと集う
- 所属意識高く欠席者を気にかける言動
- 互いに正のフィードバック

→「ちょっとした失敗」を乗り越えられた「成功体験」の積み重ね

他のOT活動参加頻度UP

OTRの対応・介入

- 定期評価しフィードバック

→モチベーションの維持

「人と交流するのが楽しい」「声が出るようになった」

## 考察

- 身体機能面においては維持
- 主体性が向上し他の活動にも参加
  - ・同質集団で実施し相互共感が得られやすい環境がより凝集性を高めた
  - ・ウォーミングアップの導入し緊張感を緩和し楽しむ雰囲気作り
- 場を共有し他患者との関わりの機会が増え、交流が楽しいと感じることが出来る
  - ・他者から受容される体験を通し、同質集団での安心感、他者からの承認と自己受容

## 結語

- 今回精神科作業療法の一環としてデリシャス体操プログラムを通し小集団の凝集性は高まり主体性の向上が認められた。その結果、活動の幅も広がりを見せた。
- 患者のペースを大切にしながらOTRの介入度合いを段階的に少なくし最終的に患者自身、自ら行動を選び適度に行えるようになった。